

# トマヤマトくん

脚本・画 森貴昭

僕は、嫌いな野菜が沢山ある。  
ニンジン。ピーマン。シイタケ  
グリーンピース。

中でも、一番いやなのはトマト！

なんてこった！ 今日のご飯、  
サラダにトマトがゴロゴロ入ってる。  
やだな、やだな、トマトやだよ。

ピンポーン、  
インターホンの音。

誰だろう？ お客さんが来るなんて。

|| 抜く ||

トヤマ「はいどうも、トヤマです。」

僕 「わあっ！！ オバケ！！」

そこには、ダルマでもない、梅干しでもない、  
真っ赤な体に緑のふんどし、  
太い眉毛のオジさん顔、  
見たこともない生き物が入ってきた。

何だ、こいつは……

|| 抜く ||

トマヤマ「いきなりオバケは、ひどいなあ。

どっから見ても、トマトやん。

トマトの、トマヤマ言っんや。

トマトが苦手だって聞いて、やって来たんやで。」

僕は頭がぐるぐるした。

トマトだって?」

こんなへんてこりんなトマトは、見たことがない。

きっと、僕がトマトがきらい過ぎして、

悪い夢を見てるんだ。

こんな夢、早く覚めてくれ!

僕は、自分でほっぺたを引っ張った。

ところが、ちっとも覚めてくれない。

|| 抜く ||

トヤマ「はいー！とらう事で、」

今回トマトがきらいって事なんですけども、  
トマトのどろろがイヤなの？」「  
いきなり、トヤマさんがたずねてきた。

僕 「トマトって、食<sup>た</sup>べると中<sup>なか</sup>の緑<sup>みどり</sup>色のゼリーみたい  
なのが気持<sup>きもち</sup>ち悪い<sup>わる</sup>し、皮<sup>かわ</sup>は口<sup>くち</sup>の中<sup>なか</sup>に残<sup>のこ</sup>るし、  
味<sup>あじ</sup>も美味<sup>おい</sup>しくない気<sup>き</sup>がする。それに…。」

トヤマ「わかった！トマトが嫌<sup>きら</sup>いなのは、ようわかった！  
ワジ、これ以上聞<sup>いじ</sup>いたら泣<sup>な</sup>いちゃうよー！」「  
トヤマさんは、泣<sup>な</sup>きぐそをかきながら  
訴<sup>う</sup>えてきた。

【 少し間をおく 】

トヤマ「よしー！じゃあ、ワジがトマト食<sup>た</sup>べれるように  
したる！今<sup>いま</sup>から庭<sup>にわ</sup>に来てちようだい！」「  
いきなり、とんでもないことを言<sup>い</sup>い出<sup>だ</sup>した。

【 抜きながら 】

僕 「えええええ！！イヤだよ…。」

庭にわに連つれていかれると、何なんだか色いろ々いろ置おいてある。

トママ「はい！という事ことで、プチトマトを育そだてたいと  
思おもいます！ 準じゅん備びしたのはコレね！」

植う木えきばち、袋ふくろに入はいった石いしころ（軽かる石いし）と土つち。  
スコップ、へんてこなジョウロ。  
そしてトマトの苗なえ。

僕「ええ〜！ トマトを育そだてるの？」

あ〜あ、どうせ育そだてるならイチゴが良よかったなあ。

僕ぼくは、嫌いや々いやプチトマトの植うえ付つけを始はじめた。

|| 抜く ||

最初に、植木ばちに石ころ(軽石)をいれる。

次に、土を半分ぐらいいれて、

トマトの苗を、真ん中に置く。  
周りの隙間に、土を入れる。

【 抜きながら 】

最後に、たっぷりとお水をあげれば、  
今日はおしまい。

トマヤマ「よし！ 土つちで汚よごれたし、  
二人ふたりで風呂ふろでも入はいるか！」

僕 「ええ！？」 僕は驚おどろいた

僕 「トマヤマさんは、これこれで帰かえるんじゃないの？」

トマヤマ「ワシ、トマト出来るまで帰かえれないで。

お父とうさんとお母かあさんと、

そはなしうはなしいう話はなしになっはなしてるもん。

一緒いっしょのお布団ふとんで、寝ねたっねてくだねさいって、  
言いわれているもん。」

僕 「ええ〜！」

僕はまたまた驚おどろいた。

|| 抜く ||

それから、トマヤマさんと、  
プチトマトを育てる日々が始まった。

朝、水をあげたり、草むしりしたり。

夜は、トマヤマさんのイビキがうるさかったり。

どンドン伸びるから、  
棒を刺して、倒れないようにしたりした。

【 抜きながら 】

そして気がついたら……

僕の背丈より大きくなって、  
青い実がいくつも出来ていた！

一番下の実は、少し赤くなり始めている。

僕 「すごい！すごい！」

プチトマトって、こんなに実をつけるんだ！」

トマヤマ「一生懸命育てたから、

ここまで大きくなったんやで、  
赤くなるまで、もう少しの辛抱や。」

【抜きながら】

ところがその数日後……。

僕「あ！ トマトに穴が開いてる！！」

楽しみにしていた、最初のプチトマトが、虫に食べられてしまったのだ。

僕は、悔しかった。腹がたった。

初めて自分で育てて、

ようやく食べれるようになると思

っていたのに。

突然、芋虫に横取りされて

泣きそうだった……。

【 抜きながら 】

トマトをむくのは久しぶり……。。

泣ないていた。

トマママ「分わかる！ 分わかるわ！ 悔くやしいなあ。

でも、虫むしが食たべたくなくなるぐらい、

美味おいしいトマトが、出で来きてるっしょいじゃん。」

トマママさんは、泣なきながら慰なぐさめてくれた。

トマママ「大だい丈じょう夫ぶ。他ほかの実みにはついてへんから、

これだけあるんや。ちよつと食たべられても、

気きにすることないで」

それからしばらくして、

|| 抜く ||

トマヤマさんの言う通り、  
沢山真つ赤なトマトがなつた。

僕はたまらず、その場で採って食べてみた。

僕「あ…、美味しい！」

トマヤマ「美味しいか？ 良かったな。  
自分でトマト食べれたやん。」

トマヤマさんは、「ニニニ」って言った。

僕「あ！ 僕、今トマト食べれた！」

|| 抜く ||

トマヤマ「トマト一個作るだけでも、大変やる？」

「これトマトだけじゃないんやで、

毎日食べるもの全部、

だれかが手間ヒマかけたものなんや。

その時間と苦勞を、

毎日食べてるのと同じ事なんやで。」

僕「うん」

それからというものの、

僕は、好き嫌いはあっても、

出された物は、

残さず食べるようになったんだ。

＝ おしまい ＝